

## 赤い色合いの天使

ウルズラ・リュットン

「<sup>レナ-テ</sup> <sup>ミュラー-</sup> <sup>ドレーゼン</sup> Renate Müller-Drehseのスタジオで、ある展示会が催されるのですが、そのオープニングでご講演をいただけますでしょうか。」去る 10 月、このような依頼を受けたとき、私は、とりあえず承諾したものの、ある条件をつけた。それは、最近の絵画が私の好みに合うものであれば、お引き受けしましょうというものだった。そのとき、たまたま私はガザリーの『幸福の錬金術』を英語からドイツ語へと翻訳をしている最中であった。後になってから分かったのだが、ガザリーの『幸福の錬金術』の内容と、Müller-Drehse 女史の絵画とがある興味深い類似性を示していたのだ。

ここで、もうひとつ思い起こさなければならないことは、絵かきである Müller-Drehse 女史も、また絵を評する私もともにアーヘン出身の人間であり、この街の歴史と伝統に強く影響を受けて生きているということだった。カール大帝 ヨーロッパ世界の創設者といわれる <sup>エクスラ</sup> が、アーヘン（ドイツ語で Aachen、フランス語で Aix-la-Chapelle と呼ばれる）に都を建設した。その中心には宮殿と大聖堂があり、大聖堂はヨーロッパ中世を通じてキリスト教信者の巡礼の地として栄え、ローマやサンティアゴ・デ・コンポステーラと並び称される場所であった。

数週間後、そのスタジオを訪ねた私は、講演を引き受けたのはまさしく正解であったと実感したのである。スタジオをとりまく雰囲気は私の魂に訴えかけてくるものがあり、あたりを埋め尽くすような暖かい色合いはいかなる来訪者をしてその気分を和らげるに十分であった。さらに、予想しなかったことであるが、私の身なりが、赤やオレンジ、そして黄土色といった絵画の色に完璧にマッチしたのである。

まず、私が深い感銘を受けたのは、豊かな色のスペクトルであった。その色合いは、見るからに、キャンバスの上に力強く塗りつけられており、何層にも色が重なり合わされていた。よく見ると、ひとつひとつの色の層が視覚的にはっきりと見えてくるだけでなく、それぞれが何と云うか不思議なモチーフを持っているように見えたのである。そこでは、具体的な形は完全に意味を失ってしまっているかのように見え、その色合いの持つエネルギーに触れるには、インスピレーションの働きを待つしかなかった。Müller-Drehse 女史は、その色づかいによって彼女自身が別世界へといざなわれているかのようにであった。ガザリーの言葉にしたがえば、色づかいにより、超越的な精神、つまり直観が生き生きと躍動するのだ。

## Müller-Drehse 女史の絵画について

創造活動の自然なプロセスであると同時に、このような絵画の主題を織り成す Müller-Drehse の思想は、Flying Creatures (飛ぶ創造物) と呼ばれる絵の連鎖で表現される。それは石器時代の洞窟絵画とよく似ており、有史以前の間が洞窟を動物の生ずる場所、また神々の住みかだと考え、宗教的儀式を行う場として利用していたことが思い起こされる。当時の人間の生活は、まさしく採集と狩猟によっていた。狩りの季節が終わると、動物の絵が洞窟の壁の上に描かれたのである。これは、多分に象徴的な意味合いを持つものではあるが、人間が生命の再生の儀式に参加するためであったのだ。人間は、この世の存在の有機的なパターンに注目し、そして存在してはまた消え去るという循環的な本質にも注意を払った。母なる大地より受けたものは、またいずれその大地へと戻さねばならない、という事実にも気がついてた。

Flying Creatures は現代芸術、今日のエコロジー的視点、そして有史以前のモチーフが興味深く組み合わせられてきたものである。Müller-Drehse 女史が創り出すものは、天の方向を向いている。鳥、目、そして、蛇。それらは、女性の豊穡を示しており、また生命のエネルギーであるクンダリーニ (ヨガで、脊柱の基部にとぐろを巻いており、修行によりそのエネルギーは脊柱を伝わり脳に作用し悟りを開くとされる) を表すものである。そして、時代を超えて多くの人々に関心を持たれており、さまざまな時代の海外に現れているのも理解できよう。

Müller-Drehse 女史は、世界的な舞台での疲れを見せることのない仕事において、彼女独自の創造性を示している。ベルリン、デュッセルドルフ、アーヘン、ハノーファー、ヴッパータール、メンヒェングラートバッハといったドイツの諸都市の名高い機関が彼女の作品を展示している。さらに、ロスアンジェルス (アメリカ)、カイロ、アレキサンドリア (エジプト)、バレンシアおよび他のスペインの都市、ロンドン (イギリス)、リージェ (ベルギー)、ヘールレン (オランダ)、バーゼル (スイス) などといった場所で作品の発表会やイベントがとりおこなわれてきた。こういったプロジェクトの中には、ゲーテ・インスティテュートとの連携で始められたものもある。最後に重要なものとして、ガザ地区において挙行されたすばらしいプロジェクトは我々の注目を引くに十分値するものである。まさに、砂漠のど真ん中とでも言っていよいような場所で行われた。Müller-Drehse 女史は、耳の不自由なパレスティナ女性とともに、「平和を支持する芸術家」というモットーのもと、あるイベントを企画実行し、すべての必要なものを彼女自身が提供した。彼女は自然のサイクルを、単に理屈の上で考えているのではないのだ。実際、彼女は、自分がかつて得たものをそのサイクルの中へと戻しているのである。

数え切れないくらいの旅の途上で集めてきたさまざまな印象がデイ・プレート (day-plate) の中にちょうど日記のように記録されている。ちょうど、小さな四角のキャンバスに描かれた土地土地の印象は後になって大きな作品へとつくりかえられていく。旅につ

いて、Müller-Drehse 女史は彼女自身をとりまく世界を広げていく 物質的な面でも精神的な面でも ものであると考えていた。しかし、このような見方は何も旅だけではなく、彼女の人生そのものにも当てはまるものであった。彼女は、自分の人生そのものを絶え間なく続く勉強と考えていたからだ。基本的に、女史は、ひとつのふさわしい人間としてのものの見方を追い求めているのと同時に、彼女自身の視点をも追求しているのである。それゆえに、Müller-Drehse という芸術家はガザリーの助言にしたがって行動しているのである。ガザリーは、人間の運命と同じく人間の起源を追い求めていくことを、人間精神の発達の基本だと考えたのだ。ゆえに、Müller-Drehse 女史は次の洞察へと行き着いた。それは、「人間に基本的な知識はすべての文化に共通するものである。その知識を達成する方法が異なるだけである」ということだ。

ガザリーは『幸福の錬金術』の中で、その方法について明瞭に書き記している。彼は、我々の中にある精神的なるものを一見支配しているかのように見える、より低次の動物的機能について、それを常に観察し、最終的にはそれを乗り越えていくように教えている。精神的な機能については、隠れたものであり、そして感じることはさらに困難であるように思える。しかし、その目には見えない精神の機能の発見は、人間精神の発達と、人間が少しでも天使に近づいていくためには必須の要件なのだ。

Müller-Drehse 女史の芸術では、天使が重要な役割を演じている。それは、あたかも秘密の使者のように、いくつにも重なる色の層の下に隠れており、秘密裏に活動しているかのようなのである。女史の絵画に精神を集中させている鑑賞者のみが、その絵に隠された天使を見つけ出すことができる。一方では、女史は、その秘密のものをずっと隠れたままにしておくこともできるのであるが、その一方で、彼女はキャンパスの上にそれが現れる姿を描こうとするのである。何層もの色が、その絵の主題にヴェールを覆いかぶせるかのように直観的に塗られている。それほど絵に詳しくないものでさえ、この隠されたものの存在 見つけだしてくれと叫んでいるのだが をすぐに感知するものなのだ。女史の絵の中には、いくつもの幕が重なっている劇場の舞台を思いださせるものがある。それぞれの幕は少しずつであるが、開いていて風にやさしくたなびいている。そして、その絵を見るものは、秘密の使者であり、また隠された本質を見つけ出そうと心を鼓舞されるのである。

## 結論

ガザリーに限らず、他の多くの東洋の思想家にとって、体と心と精神のバランスを保つ方法を見つけ出すことは最重要の課題である。物質的、感覚的な方面に力点をかけることが、そろそろ是正されるべき時期へと来ている。シナ文化においては、ぶつかり合う力の均衡をとるという考えは、陰と陽という二元論的対立のなかで語られている。この点については、シナの古典『易経』の中に記されている。この陰と陽という二元論主義は東ア

ジア地域の伝統におけるすべての側面の基礎をなしており、医学と同様に建築にまでその考えが応用されている。日本の文化においては、道教的な教えが重要な位置を占めており、例えば、武道、華道、あるいは茶道といったさまざまな伝統の中にその足跡を見いだすことができる。

インドのヨガでは次のように言われている。「幸福を追い求めることは、人間の精神の本性である。しかるに、人は、現世の欲望を満たした後でも満足を得ることはない。しばらくすると、また新たなゲームが始まるのだ。なんとなれば、精神は変わらないままであり、その真の欲望は満たされていないままだからだ。しかし、我々は、この自分自身の中に喜びと知恵の源を有している。絶え間なく躍動する精神を鎮め、内面を落ち着かせることで、この源を認めることができる。我々が、内なる目標に気持ちを向けることができたなら、我々は平和のうちに一生を過ごすことができるであろう。」（「すべての人生の段階へのヨガ ( *Yoga für alle Lebensstufen* ) 」 Sivananda Yoga Zentrum 編, Gräfe und Unzer, München 1986 参照)。

ヨガに示された内なるものへの関心の集中は、より充足感の幸福を見いだすために物質的な世界には背を向けるというガザーリーの考えに似ている。彼が薦めていることは、現世的な欲望と、それが精神的な性質を帯びていく様になる様子をしっかりと観察することということである。そして、その目的は、究極的には、天使的な資質にまで努力して達成するということである。